

地域子ども研究員の活動について (2)

さよう子どもアートスクールサポーター・岸本 秀子 (佐用町生涯学習課)

県立佐用高校生徒と卒業生の約15名が学校外の活動として、「さよう子どもアートスクール2006」の活動を支援しています。

● “キャラバン” を経て ●

「さよう子どもアートスクール (以下、アートスクール)」の本格始動は平成16年度からになりますが、平成14年度に“ひとはくキャラバン”が佐用で開催されたことがきっかけです。これまでは創作行為、作品主体であった子どもの事業が、過程を重視し、また自然活動を重きにおいた活動に展開することとなりました。

“自然科学への興味関心をもたせる”と美しい謳い文句を掲げてはいますが、真の目的は創造性 (想像性)、感性豊かな子どもを育てることであり、活動自体をその機会としてとらえています。“人は人の間でしか成長しえない”という観点から、講師対個々の参加者という図式でなく、参加者間のグループ活動であることにこだわりました。

企画立案時、当時佐用高校の横山正教諭に青少年育成を兼ね、小グループのリーダーとして佐用高校生に協力を依頼できないか相談したところ、前端的に支援して下さることになりました。そうして平成15年度末に養成講座を設け、その受講者を中心に「さよう子どもアートスクール グループ活動サポーター (以下、サポーター)」として活動を開始することになったのです。

● 成果と課題 ●

現在3期目、紆余曲折を経て、ようやくアートスクールの運営や、子どもたちとサポーターとの関係など、事業のスタイルがみえてきました。

担当者の意思が反映されてか、子どもたちは活動内容もさることながら、異なる学校、異なる学年の友人との出会いを楽しみに参加しているようです。リピーターも多く、また兄弟姉妹での参加が多いのも特徴ですが、サポーターの存在が彼らの参加率に関わっているようです。兄弟姉妹のいない子どもたちにとって、兄であり、姉である彼らは、指導者であると同時に、



「泥んこお絵かき」
うまくロウが溶けてくれません。
高校生も大苦戦です。



「昆虫のお面作り」
これから昆虫採集に出発！
たくさん捕まえるぞ！

遊び相手でもあるのです。

サポーターも、将来子どもと関わる仕事を目指している者の参加だけではなく、子どもたちと同じ視点で活動内容を楽しみ、学外での新しい体験としてとらえ、参加している者もいるようです。

活動の中で、彼らもリーダーシップを身に付け、頼もしくなってきました。3期になると、卒業生も参加してくれるようになり、新しく参加したサポーターの良き先輩として、サポーター間の関係づくりにも力を発揮しています。彼らの成長も大きな成果の一つです。

アートスクールは、自然を舞台にして世代間交流や若者の交流の場になっているともいえます。自然に身をおけば、おのずから遊ぶ方法を発見し、メンバー全員で楽しんでいる姿をよくみかけました。これは子どもたち自身がもっている本来の力なのでしょう。今はやりのプレーパークにも似ているかもしれません。サポーターはプレーリーダーとしての役割を担っているようです。

今年度は“地域子ども研究員”として活動しましたが、「研究員」としての性格は弱いものでしょう。しかし、科学の視点・知識を少しずつ獲得して経験を重ねていくことで、自然を生かした遊びの内容により幅が生まれ、また今後の活動が発展していくものと思います。

[サポーターとして活動して] (2月11日の発表より)

私は高校二年生からこの活動に参加したので2年間お手伝いさせて頂いています。

高校生になり、自分の将来とか進路を考え始め「保育士」になりたいなぁ…と漠然とした夢を描いた頃にこの活動を知りました。子供に触れること、お世話をすること、新しい出会いの中で行う活動に将来のヒントが有りそうな気がして、サポーターに応募致しました。

実際に活動して感じたことは、通っている小学校も違う、だから普段会って遊ぶ事はない子供たちが、こういった会に少しの勇気を持って参加することによって出会い、会っている時間の長さに関係なく皆仲良くなる事が出来る、スゴイなぁ！

皆で山に行ったり、川に行ったり、街中を歩き回ったり…そして絵を描き、指導員の一言の中から話し合い、作り出す色んな作品。そういった物に触れたり、活動中の子供達のステキな閃き、奇抜とも思えるアイデアに驚かされ、なるほど！と学ぶ事がしょっちゅうでした。

初めのうちは、慣れない事にとまどったり、何をどうすればよいのかと黙り込んでいた子供たちも、回を重ねる毎に自分の意見や感想を持ち、今日のようにまとめて発表できるようになるなんて成長に目を見張る！ものでした

田舎であってもスイッチ一つで何でも出来る今、こんな大自然に囲まれた中で親から離れて行うこの活動は、体を動かし、頭を働かせ、自分のもてるもの全てを使い、私の意見とみんなの意見を出し合い、違う事を認め尊重し共に成長しようとする、生きていく力が湧いてくる場だと思います。私は、自然の中に子ども達と一緒に入って、エラソウに言っても虫が大の苦手で、逃げ出しそうになりました。それでも2年間参加し続けることが出来たのは、活動自体が本当に楽しかったからだと思います。

私は、やはり「保育士」の道に進むことに決め、春から学び始めます。

今、保育園でも「危険」だから「近くない」からなどと言う理由で、子供たちが自然に触れる機会がなくなっていると聞きます。私はこの「さよう子どもアートスクール」で感じた事、学んだ事を生かして、明るく大らかな保育士になりたいと思っています。

私も子ども達と一緒に活動に参加出来たことで、少しは成長できたかなと大変嬉しく思います。これからも、このような活動の場が広がっていくことを願っています。

(佐用高校3年堅木沙恵)

●今後の展開●

担当者としては、サポーターが主体となって事業を企画運営していけるようなシステムになれば、と思っています。そのためには、まずサポーター養成講座の内容を更に充実させることが必要です。高校生対象の地域研究員養成講座が必要なかもしれません。現在は、子どもとの接し方などコミュニケーションスキルが主なため、講座の企画等に費やす時間が不足しています。当面は、子どもたちと一緒に遊び、学びながら、サポーター自身の力を高めていってもらえるようになるでしょうが、並行して実施していけることが望ましいでしょう。

将来的には、現在のアートスクールのメンバーがその後サポーターへ移行できるように事業を継続させていくこと、については地域のリーダーへと成長してくれることを望んでいます。「千種川圏域清流づくり委員会」とも毎年連携していますし、佐用高校の横山和之教諭はじめ他の先生方も顧問的立場で関わってくださっています。また、なるべく様々な地域で、その土地の人にお世話になりながら活動しています。そうした様々な地域の人々との交流から、佐用の自然を愛し、地域文化を守り伝える後継者となってくれることも期待しています。

地域の子どもたちの活動を支える大人たちのネットワーク化が必要です。こうした活動の基盤として、ひとはくの研究員の方々による継続した支援はもちろん欠くことは出来ません。佐用地域には、豊かな自然も人的資源も揃っています。大人たちの思いを受け、子どもたちや高校生サポーター“地域子ども研究員”がいずれ立派な“地域研究員”に、佐用の未来の担い手に育ってくれるよう願っています。



「植物画を描こう」
みんなで畑にいった、モデル探し。
何を描こうかなあ？



「コツコツ骨格標本」
鹿の骨を組み立てていきます。
みんなで大苦戦！

(文責：佐用町生涯学習課 岸本)